

## 【2】三昧耶戒序

写1冊

〔書名よみ〕さんまやかいじよ 〔著編者〕空海撰

〔写刊年次〕鎌倉中期

〔外題〕三昧耶戒序

〔内題〕三昧耶戒序 遍照金剛撰

〔その他〕〈尾〉三昧耶仏戒儀一卷

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕中破 〔装訂〕卷子本 〔表紙〕有・栗皮無地(茶染紙) 〔紙数〕一六紙 〔料紙〕楮紙(杉原) 〔本文用字〕漢字 〔法量〕縦二七・六糎×横七一七・八糎(全長)、横各紙①二四・七、②二四・四、③四九・八、④四九・九、⑤四九・八、⑥五〇・〇、⑦五〇・〇、⑧五〇・〇、⑨五〇・〇、⑩五〇・二、⑪五〇・一、⑫五〇・〇、⑬五〇・五、⑭五〇・二、⑮四九・九、⑯一八・二糎 〔界線〕有・淡墨界 界高 二・九糎、上欄高 二・四糎、下欄高 二・九糎、界幅 一・九糎 〔行字数〕一紙二五行、一行一七字 〔訓点〕朱点(円堂点) 〔表紙書入〕禅之箱 〔書入〕有、校異・注記・訂正(墨・朱) 〔印記〕ナシ 〔備考〕裏打修理済。糊離あり。巻尾軸跡あり。表紙見返に「伝領文海」と墨書あり。

〔奥書〕(本文別筆)

正和五年十月六日買領之禅珠

〔解題〕

本書は、三昧耶戒を受けようとする人のために作られた空海の著作である。三昧耶戒は、秘密三昧耶戒とも、仏性三昧耶戒とも、菩提心戒とも

も称される。ここに『三昧耶戒序』というのは、後に『秘密三昧耶戒儀』が続いており、その序分にあたるもの、との意と思われる。

また『平城天皇灌頂文』の第四文に同じものとされ、『平城天皇灌頂文』の第一文と同年の作ならば、弘仁十三年(八二二)の作となる。

活字は、『弘法大師全集』第五巻に、高山寺藏平安末期写本を底本とするものが所収されている。

『弘法大師全集』第五巻の解説によると、古写本は以下が知られる。

- 1、平安末期(院政期)写 一帖 高山寺
- 2、寛治八年(一〇九四)写 一帖 高山寺
- 3、建長二年(一二五〇)写 一帖 仁和寺
- 4、平安末期(院政期)写 一帖 高野山大学図書館
- 5、建久七年(一一九六)写 一帖 高野山正智院
- 6、鎌倉末期写 一帖 仁和寺
- 7、大永六年(一二二六)写 一帖 高野山宝亀院
- 8、天正十九年(一五九二)一帖 醍醐寺
- 9、江戸初期写 一帖(後欠) 高野山宝亀院

また刊本は以下の四部が知られる。

- 1、江戸初期刊 一帖(古活字版) 高野山大学図書館三宝山文庫(一部)
- 2、江戸初期刊 一帖(古活字版) 長谷寺豊山文庫
- 3、江戸時代刊 一帖(古活字版を復刻した整版本、刷付訓あり)
- 4、明暦二年(一六五六)刊 一冊

〔刊記〕「明暦貳年霜月吉旦／長谷川／市郎兵衛判刊」

その他、刊記を削った版、高野山永寧坊山本平六の奥付の後印本があ

るとのことである。

また以上の諸本の内、写本1の高山寺本を除く全ての写本・刊本に『秘密三昧耶仏戒儀』が合本されていて、古くからこの両者が一具として伝写されていたことを物語るとし、また『三昧耶戒序』が単独で書写されていることは珍しい、とする。

円覚寺蔵本の場合は、『秘密三昧耶儀仏戒義一卷』が合わせて書写されていて、一具として伝写された一本である。奥書には「正和五年十月六日買領之 禅玠」とある。「正和五年（一一三六）」のこの奥書は、「買領」（購入した）とあり、いつの書写であるのかその年次は不明である。また「禅玠」も僧名と思われるが詳しいことはわからない。

また、円覚寺蔵本には、表紙見返に「伝領文海」の墨書がある。これは『秘蔵記』（前掲解題1）など、他の文海本と比較しても、文海（一一九三〜一三六一…）の自筆と判断される。

文海は、醍醐寺報恩院隆舜の付法で、上醍醐の釈迦院に住した。新井弘順氏によれば、醍醐寺には文海書写の聖教や法会の記録が残されていて、故実者として重きをなしていた僧ではないかと考えられている。

表紙には「禅之箱」と墨書があり、これは醍醐寺所蔵聖教の分類に一致し、「文海」の署名とともに、醍醐寺旧蔵本の証拠となる。

本書は、「文海」の署名から南北朝以前のものと知られ、書写年次は不明ながら、料紙など本の徴証から、鎌倉中期の写本の可能性が指摘される。本書は、古写本の伝本の新出本として、貴重な一書であると言えよう。

また本書には、書入や訂正が数箇所確認できる。例えば、冒頭十行目の「悲幻炎観識」の「識」の字は、墨書で訂正している。こうした箇所がしばしば見られる。今後はこうした訂正なども細かく検証し、伝本系統などの比定をしていく必要があると考えている。

〔注〕

（1）年代の認定は、永村眞氏の御教示を得た。

〔参考〕

- ・田中千秋「三昧耶戒序の理解」『密教文化』一二〇、一九七七年二月
- ・甲田宥咩「三昧耶戒序」解説『定本弘法大師全集』第五卷、高野山大学密教文化研究所、一九九三年
- ・遠藤祐純「三昧耶戒序」解説『弘法大師空海全集』第四卷、筑摩書房、一九八四年
- ・新井弘順「醍醐寺蔵本『真言声明血脈』解説」『研究紀要』一三、醍醐寺文化財研究所
- ・新井弘順「真言声明慈業系大進上人流の展開」『醍醐寺の密教と社会』山喜房仏書林、一九九一年

（渡辺 麻里子）





三昧耶戒序 遍照金剛撰  
若夫一千二百草藥七十二種金丹悲  
身病而作方一十二部妙法八万四千經  
教衰心疾而垂訓身病百種即方藥不  
能一途心疾萬品經教不得一種是故我  
大師薄伽梵施種之藥療種之病五常五戒



三昧耶戒序 遍照金剛撰  
若夫一千二百草藥七十二種金丹悲  
身病而作方一十二部妙法八万四千經  
教衰心疾而垂訓身病百種即方藥不  
能一途心疾萬品經教不得一種是故我  
大師薄伽梵施種之藥療種之病五常五戒  
即愚童持齋之妙藥六行四禪則嬰童無  
畏之醍醐二百五十之戒四念八背之觀十二目緣  
十二頭陀遮人我而證三昧帶法執而得涅  
槃斯乃聲聞之教藥緣覺之除病無緣起  
悲幻炎觀識去度為行四攝作事三祇積  
功四智得呆斯為他緣大乘之方法捨無  
我而得自在觀不生而覺心性揮八不以  
斷八迷擲五句以拂五邊四種言語道斷  
而無為九種心量是絕而寂靜是則覺心  
不生之妙術觀自心於妙蓮喻境智於照  
潤三諦俱融六即表位是則如實一道心之  
針艾况復喻法界於帝細觀心佛於金水  
六相十玄熾其教義五教四車蘭其淺深  
初發成正覺三生證佛果斯乃極無自性  
心之佛果如是妙法並皆契其幾根不思議  
妙藥自上諸教他受用應化佛之所謂甘露  
今所授三昧耶戒者即是大毗盧遮那  
自性法身之所謂真言曼荼羅教之戒也  
若有善男善女比丘比丘尼信男男女等欲入



自性法身之所說真言曼荼羅教之戒也  
若有善男善女比丘比丘尼信男善女欲入  
此乘修行者先發四種心一信心二大悲心  
三勝義心四大菩提心初信心者為欲決定  
堅固無退失故發此心有十種一澄淨義  
能令心性清淨明白故二決定義能令心性  
淳至堅固故三歡喜義能令斷除諸憂  
性故四無厭義能令斷除懈怠心故五隨  
喜義於他勝行發起同心故六尊重義於  
諸有德不同輕賤故七隨順義隨所見聞  
不違逆故八讚歎義隨被勝行至心稱歎  
故九不壞義專在一心不怠失故十愛樂  
義能令成就慈悲心故

二大悲心者亦名行願心言外道二乘不  
起此心但有菩薩大士能發此心觀法界  
無緣一切眾生猶如己身所以然者善人  
之用心先他後己又達觀三世皆是我四  
恩四恩皆墜三惡趣受無量苦吾是彼  
之子也亦彼之資也非我誰能拔濟是  
故發此大慈大悲心大慈能與樂大悲能  
拔苦拔苦與樂之本不如絕之源之源  
不若授法藥難方者前所說八種法門是  
彼之本然猶隨順機根故有淺深遲速  
為欲普擇如是諸法教發第三勝義心  
之名深般若心去何簡擇若有上根上  
智人欲行如是法早歸自心本宅先須簡  
知乘之差別欲簡知此乘優劣非是凡夫

知乘之差別欲簡知此乘優劣非是凡夫

知乘之差別欲簡知此乘優劣非是凡夫  
二乘及十地菩薩所知境界但依如來所  
說知之耳如來明說其差別是故攬此  
龜鏡可簡得異生羗羊凡夫專造十不善  
業業就三毒五欲之樂不曾知後身墜三  
途極苦是故真言有智人不可樂者愚童  
持齋人乘之法雖去漸信因果行五常五  
戒等猶是人中之因不得生天之樂是故  
不可樂者嬰童無畏天道生天之樂雖云  
下從四王天上至非想受天樂終墜  
人中地獄等不得出生元是故不可樂唯  
蘊無我拔業因種二種羊鹿乘雖出三界  
猶是下劣三生六十之劫七八百之時何  
其眇焉是故不可樂求他緣大乘覺心不生二  
種法門捨身命而行布施許妻子而與他  
人經三大阿僧祇行六度萬行劫石高廣  
難盡弱心易退難進十進九退吾亦何堪  
如實一道之心雖去拂心而入清淨境界  
智而證如猶是一清淨之樂未入金剛  
之寶藏是故亦不可任極元自性心者雖  
云融法界而證三世間身等帝細而得  
一大法猶是成佛之因初心之律五相成  
身四種要法未能具足是故不可謂未得  
為得未到謂到如是依如來教勅以嚴上  
知惠簡乘差別發菩提心若有人等乘  
如是車行所行道未名嚴上淨菩提心是  
故真言門菩薩起此諸住心等發菩提心



知惠簡素差別茲菩提心若有人等乘如是車行不行道末名寂上淨菩提心是故真言門菩薩起此諸住心等發菩提心行菩提行為知此乘差別茲深般若勝義心

淨

四言菩提心者此有二種一能求菩提心二所求菩提心能求心者譬如有人欲為善與惡必先標其心而後行其行去求菩提之人亦復如是又如狂人解毒忽起歸宅之心遊客事畢乍發懷土之思求菩提之心亦復如是既知狂醉在三界之獄繫眠卧六道之數何不駢神通之車速歸本覺莊嚴之床此即能求之心不求之心者所謂無盡在嚴金剛界身是也夫毗盧遮那四種法身四種曼荼羅身是一切眾生本來平等共有雖然被五障之覆弊依三妄之雲翳不得覺悟若能觀日月之輪光誦聲字之真言茲三密之加持揮四印之妙用則大日之光明廓周法界無明之障者忽歸心誨無明忽為明毒藥乍為藥五部三部之尊森羅圓現剎塵海滴之佛忽然涌出住此三昧名秘密三摩地諸佛如來以此大悲勝義三昧地為戒無時暫忘何故以此名戒有二種一毗奈耶此翻調伏二尸羅翻去清涼寧靜觀一切眾生猶如己身及四恩故不敢致害其身命觀眾生猶如己身故不敢奪盜其所有財物觀眾生猶如四恩故不

不敢致害其身命觀眾生猶如己身故不敢奪盜其所有財物觀眾生猶如四恩故不敢凌辱汗穢觀眾生猶如己身四恩故不敢誑觀眾生如己身四恩故不敢以惡惡語罵詈觀眾生如己身四恩故不敢離間觀眾生如己身四恩故不敢貪求所有財色觀眾生如己身四恩故不敢貪求所有財色觀眾生如己身四恩故不敢行願故自然離十不善心離十不善等即是調伏戒由離其惡心故心中得清涼寧靜是則尸羅之戒亦是饒益有情之戒又深以般若妙慈觀前九種住心無自性云何無自性謂如冬凍遇春即泮流金石得火即消鑿諸法皆從緣無自性是故異生羶羊几夫一向惡心遇善知識教誘故起愚童持齋心愚童人乘人信因果故起生天謹戒心嬰兒童無畏心願殊勝解脫智故依善知識誘教唯蘊無我拔業因種二乘心二乘之人蒙諸佛警誘故起他緣大乘心他緣乘人願寂勝果故起覓心不生心覓心不生人無自性故起一道如實心一道如實人蒙諸佛警誘覺故發極無自性心極無自性人願究竟寂勝金剛心故茲秘密莊嚴心是皆由無自性故展轉勝進以深般若觀無自性故自然離一切惡修一切善饒益自他眾生即是三聚妙戒具足無缺住秘密三摩地亦復如是住此乘者以此戒檢知自身心教他眾生即此秘密三

摩耶佛戒也



以此戒檢知自身心教他眾生即此秘密三

摩耶佛戒也

秘密三昧耶佛戒義一卷

夫欲發无上菩提之心應先深心觀察十方諸佛清淨性海湛寂圓明本无生滅廣大無碍無相无為常寂滅相愍諸眾生為諸妄想煩惱迷覆淨心不覺不知昏、默、貪、嗔、癡、毒、日夜燒瀦六賊攻劫五欲纏縛昏狂既盛无所覺知慙念此輩從大悲海流演化身不生而生无相現相假造言說示現去來皆為憐念我等眾生起方便智施權實教為欲引導利鈍根性施設種、頓、漸法門是故我等慚愧諸佛慈悲方便愍念眾生沉淪苦海應當發起廣大之心誓願斷除一切眾惡誓願修習寂上法門誓願度脫諸眾生界摠求速證无上菩提諸佛勝果是故發起菩提之心廣如菩提心義說所謂菩提心者即是諸佛清淨法身亦是眾生淨心本尋遂根源本无生滅十方求之終不可得離言說相離名字相離心緣相妄心流轉即名眾生染汙之身開發照悟即名諸佛清淨法身故不增不減經云不離眾生界有法身不離法身有眾生界眾生界即是法身法身即是眾生界故經又云眾生界清淨應知即法身、即涅、槃、即如來以是觀之一切眾生性淨法身與諸佛身本无差別而諸佛如來昔在因地迷本法身与我无異然發大精進勤修

法身與諸佛身本无差別而諸佛如來昔在

因地迷本法身与我无異然發大精進勤修正行已成正覺我今云何貪戀淤泥不起正行故發是心又觀眾生沉淪苦海沒生死河迷首心源喪失惠命愍念彼等与我法身平等无二云何信任不垂救授是故勇猛發起大悲度諸眾生破魔惡敵是故發起菩提之心

次應略請一切諸佛

弟子某甲等誓首和南十方諸佛毗盧舍那清淨法身報身化身功德圓滿一切如來及諸菩薩摩訶薩眾降臨道場以大慈悲接濟我等以大智慧照明我等我等今者為欲發起大菩提心棄捨生死破壞魔眾摧伏外道超越二乘捨求諸佛大悲行願是故我今歸命頂禮教誦禮佛真言普禮真言曰

唵薩縛怛他薩乎多引跋娜滿那南迦廬鉢

南无東方阿閼佛乃至清淨法身毗盧遮那佛

次應供養

弟子某甲等願以清淨殊勝香花幢幡寶蓋飲食燈燭常願供養一切諸佛及諸菩薩

一切賢聖

普供養真言曰

唵識、曩三縛縛、日囉二解

以我功德力如來加持力及以法界力普供養諸尊



弟子某甲等 我從今日 發菩提心 誓願斷除

一切眾惡 誓願修習無邊法門 誓願度脫

一切眾生 誓求如來一切勝果 乃至當生

菩提道場 常無退轉 我等今日 與諸菩薩

和合發心 願尊證知 三說

發菩提心真言曰

奄冒地即多母怛波 二那野 并祿

涅槃經云初發心已為人天所勝出聲聞

及緣覺如是發心出過三界是故得名寂

无上花嚴經云佛子始發心如是妙寶心

即超凡夫位入佛所行處

次問言諸仁者能受持一切諸佛菩薩寂

勝寂上大律儀不 卷言 能

次請賢聖 三請

弟子某甲等奉請十方一切諸佛為大尊證

弟子某甲等願大德為我作證明 奉請不動

寶生阿彌陀天鼓雷音為作和尚為依和尚

故得受具足和上清淨三昧耶戒為我作

和尚慈愍故 至心奉請雄猛阿闍梨

寂勝寶生尊 大悲阿彌陀成就 不空葉

此諸无上尊至心稽首請及薩埵金剛

降伏於一切勝上虛空藏能授諸灌頂

救世觀自在顯三昧瑜伽巧毗首羯磨善作

諸事業 如是轉輪者唯願受我請 三請

-12 149 40 380" data-label="Text">

次應奉請羯磨及教授

次應奉請羯磨及教授

普賢慈氏 妙德除蓋障 為羯磨阿闍梨 如是

四菩薩指如賢 祝闍一不可

第一普賢菩薩摩訶薩普者遍一切眾賢

者寂妙善義謂菩提心所起願行及以三業

志皆平等遍一切處又名金剛者喻實

相義過一切語言心行遍無所依不示諸法無

初中後不盡不壞離諸過惡不可變易故

名金剛世間金剛有三種義一不可壞二實中之

寶三者戰具中勝

第二慈氏菩薩於四無量心慈寂為稱首

第三妙吉祥菩薩妙者更無等比義元過

上者義吉祥者嘉慶之善譽亦名妙德亦曰

妙音

第四除蓋障菩薩眾生種心垢能翳若

提此是菩薩能除蓋障之罪靈明現大日之

先是故奉請此四菩薩為羯磨阿闍梨

奉請普賢慈氏妙吉祥除蓋障四大菩薩

為我作羯磨阿闍梨為依阿闍梨故得授

菩薩清淨三磨耶戒慈愍故 三說

次又應奉請普賢菩薩金剛薩埵觀世自

在三大菩薩為教授阿闍梨

第一普賢菩薩即如法身具備万行對

精進門息灾方便故

-3 603 31 838" data-label="Text">

第二金剛薩埵菩薩對金剛智惠門降伏方

-66 603 94 838" data-label="Text">

便故

-129 603 157 838" data-label="Text">

第三觀自在菩薩對蓮花三昧門增益方



便故

第三觀自在菩薩對蓮花三昧門增益方便故此三聖者名曰无量不可思議妙用三點即般若解脫法身是故三點攝一切法所以奉請此三大菩薩應為作教授阿闍梨至心奉請普賢菩薩金剛薩埵菩薩觀自在菩薩為我任教授阿闍梨慈愍故

次說羯磨

諸佛子至心諦聽令與仁者羯磨授戒三

是得戒之時至心諦聽羯磨

仰願十方一切諸佛諸大菩薩慈悲憶念

此諸佛子等始從今日乃至當坐菩提道場

受學過去現在未來一切諸佛諸大菩薩

清淨妙戒所謂攝律儀戒攝善法戒攝生

有情戒具足受持始從今日盡未來際

諸佛子等具足受持諸佛菩薩清淨戒

是事如是持授戒竟

次甄別戒性

已發菩提心具菩薩戒竟復應備四攝法

及四波羅夷及十重戒不應缺犯其四攝

者所謂布施愛語利行同事為欲調伏無始

慳貪及利益有情故應行亦施為調伏莫

恚惱慢煩惱及利益有情故應行愛語為

欲饒益有情及滿本願故應修利行為欲觀

近善知識及令心無間斷故應修同事如是四

法是修行處是事如是持

今入此三密門即身口意密復應淨除四障

今入此三密門即身口意密復應淨除四障  
所謂四障者一者於有情中及一切法中作  
種不平等見是第一障二者於平等作  
種不平等見是第二障三者諸有所作隨順  
名利不為大事回緣是第三障四者放逸懈  
怠不能警覺身心是第四障如是四障若纒繫  
即為自損亦損於他是故精勤攝除四障應  
如是持

次應修四威儀名無作於其功德運之間自  
然增長者於一切如來正法藏中攝願斷了  
二者於一切菩薩正行之中攝願勤行者於  
一切如來度人門中攝願修集四者於一切有  
情中以四攝法而救濟之令離苦難安是名  
四無作功德應如是持  
將入陀羅尼門復具三種三昧耶是踐如來不  
行之迹必須專精四波羅夷誓無缺犯  
所謂四波羅夷者若有毀犯由如斬頭命根  
不續則一切支分無所能為不久散壞菩提  
心戒四種戒相亦是火乘正法命根若破壞者  
由如死尸雖修種種功行不久敗也

第一不應捨正法而起邪行或為如來正法  
欺惑當修行受持讀誦由如大海吞納百川  
欺惑心若於諸乘了不了義隨於一法生棄  
捨心及起邪行即名毀犯第一波羅夷不得  
犯能持否  
第二不應捨離菩提心或於菩薩方行猶



不應毀謗三乘教典訛佛法故四者於甚深大  
乘經典不通解處不應生疑非凡夫境界故  
五者若復有人已發菩提心者不應說如是法令  
彼退菩提心趣向二乘斷三寶種故六者見未  
發菩提心者亦不應說如是法令彼發於二乘之  
心違本願故七者對小乘人不應輒說深妙大  
乘恐彼生誹謗大殃故八者不應發起耶見斷善根  
故九者於外道前不應自說我具无上菩提妙戒  
令彼以真苦心求如是法不獨能辨退菩提心  
二俱損故十者但於有情中兩損害及无利益  
皆不應自作及教他作見作隨喜即於利他  
法中及以慈悲相違背故  
如是或者不同小乘一期為限量三十為境  
界又聲聞律儀因緣造作以无餘涅槃為究  
竟今此所授從一切智生終趣薩婆若海無有  
窮盡又聲聞法中雖有具足煩惱學无學等  
階次不同然所發无作律儀則无優劣之異  
今此菩薩律儀亦復如是雖復寂初發心乃  
至卅三地階次不同然一時普遍法界發起  
無作善根則与如来更無增減之異今授戒已  
竟將紹法寶与佛在世更無異也即是佛真  
子當補佛位是則寂上寂尊无比无等之戒  
也速滅罪障頓證菩提之門也

三昧耶佛戒儀一卷

至卅三地階次不同然一時普遍法界發起  
無作善根則与如来更無增減之異今授戒已  
竟將紹法寶与佛在世更無異也即是佛真  
子當補佛位是則寂上寂尊无比无等之戒  
也速滅罪障頓證菩提之門也

三昧耶佛戒儀一卷

正和五年十月六日員領之禪珎

正和五年十月六日員領之禪珎